一般助成　災害復興コミュニティ支援（東日本大震災）

「被災地コミュニティ再生と社会的弱者生活再建のための『なりわい』づくり」事業

復興支援と障がい者支援を融合させることで被災地に新たな希望を創造する取り組み

東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県釜石市と大槌町で、「まごころ就労支援センター」と「まごころの郷」を運営しながら、復興支援と障がい者支援を融合させ、新たななりわいづくり、地域コミュニティづくりに取り組んでいる団体がある。震災の記憶の風化が叫ばれる中、持続的な支援の必要性について改めて考えさせられた。

ぶどう、ワインの生産を通して地域コミュニティとの協働につなげる活動を実施

社会的弱者をサポートする態勢や制度が厳しくなる中で生活の礎となるなりわいを

東日本大震災直後に設立されたNPO法人「遠野まごころネット」は、発災直後の瓦礫撤去や物資配布などの緊急支援活動に始まり、岩手県を中心とした被災地の復興支援活動、自然と共存した社会の創出活動、なりわいづくり・コミュニティづくり活動まで、多岐にわたる活動に取り組んできた。現在は、まごころ就労支援センター（被災地の障がい者支援事業―大槌町・釜石市）、サンタが100人やってきた!（ボランティアのサンタクロースが被災地を訪問するクリスマスイベント―大槌町・釜石市・遠野市）、まごころサンタ基金（被災家庭の学生への奨学金給付プロジェクト―大槌町・釜石市・大船渡市・陸前高田市）、緊急支援活動（自然災害被災地での復旧支援活動―熊本県、ネパール、岩泉町、岡山県）などの活動に取り組んでいる。

東日本大震災から9年が経過し、岩手県の被災地では居住・商業地域での復旧が最終段階に入っているが、復旧工事が終わっても一人ひとりの生活の基礎となる産業が復興できなければ、コミュニティの再建はおぼつかない。同法人では被災地域を回り、改めて被災者と話をすることで新たな現実に直面させられているという。

「社会的弱者をサポートする態勢や制度が、どんどん厳しい状況になってきています。被災者の自立という言葉が聞かれますが、それは一面では突き放しや責任放棄を容認する言葉となり得ます。社会的弱者を支えるということは、彼らをサポートする態勢も支えるものでなければなりません。障がい者だけではなく、子育てや高齢者介護も同様です。子どもを守る親や地域、高齢者を介護する家族や介護職の方々を支える制度や配慮が今の地域社会には欠如しています」と、同法人の関係者は語る。

復興支援と障がい者支援を融合した新たななりわいづくり、地域づくりを目指す

そのため同法人では昨年度、AJOSCの助成を活用し、大震災で甚大な被害が出た岩手県釜石市と大槌町を中心に、復興支援と障がい者支援を融合し、新たな希望を創造するためのなりわいづくり、地域づくりとして、各種の研修やイベントを行った。「これまで取り組んできた手芸品やぶどうをはじめとする農作物などのレベルアップを図るには、伸ばすべきものは伸ばし、転換すべきものは転換するという覚悟が必要です。また、より効果的に事業を進めるためには、基礎知識の習得や実地研修などが必要不可欠です。そのため専門家による研修会などを行い、開拓の糸口となるように取り組みました」と、同法人は話す。

具体的に実施したのは、①ぶどうの苗木つくり、②収穫祭、③書道アート、④裂織講習、⑤よろず相談会などだが、のべ200名近い参加者があったという。ぶどうの苗木つくりは、国産ワインに注目が集まる中、国内で苗木の生産が追い付いていない現状を打開するためのもので、将来的には現地でぶどう、ワインの生産性を向上させ、なりわいづくりや地域コミュニティとの協働につなげる目的がある。また、特に重要性を感じたのがよろず相談会で、高齢者の将来に関すること、権利や相続に関すること、仕事に関することなど、普段気軽に相談できないことを具体的に話すことができてよかったと好評だったという。「また参加したい。次の予定を早めに知らせてください」という参加者の声に、実施した同法人でも救われた気がしたと話す。

制作したワインは『いわてワイン』を楽しむタベに出展しPR

書道アート教室も開催

助成団体:特定非営利活動法人　遠野まごころネット　http://tonomagokoro.net

支えなければならない人たちを支える本助成に感謝を込めて

「無償の奉仕」という言葉は軽々と口で言えることではなく、実際の行動で示すことだと考えています。まさにこのことを実践しているのが、AJOSCによる本助成事業だと思います。感謝の気持ちとともに、これからもあらゆる方面にこの制度が発展することを願っています。

特定非営利活動法人　遠野まごころネット
理事長　佐藤 正市さん